

【書評】

ダニー・ラフェリエール著

『ニグロと疲れなくてセックスする方法』（立花英裕訳）

藤原書店、2012年

Dany Laferrière,

Comment faire l'amour avec un nègre sans se fatiguer, VLB éditeur,
1985.

小倉和子
OGURA Kazuko

2011年秋、作家の初来日に合わせて日本語訳が出版されたダニー・ラフェリエール（Dany Laferrière, 1953-）の『帰還の謎』（2009年）と『ハイチ震災日記』（2010年）は廣松勲会員により本誌前号で書評に取り上げられたが、今回、彼の文字通り「原点」といえる作品がようやく日本語で読めるようになった。タイトルは何とも刺激的な（しかし原題にきわめて忠実な）『ニグロと疲れなくてセックスする方法』。1985年に出版された処女作である。同作品はカナダやアメリカで大反響を呼び、1989年にはジャック・W・ブノワ監督によって映画化されて日本でも『間違いだらけの恋愛講座』という邦題で公開されたので、ご記憶の向きもあるかもしれない。しかし、じつは本書はそんなオブラートに包んだような邦題からは想像しがたい挑発的なメッセージを含んだ作品である。

出版当時ケベックで話題をさらい、多くのインタビュー記事や書評が出た本作品について今さら何を語るべきか、とも思うが、日本の読者にとっては30年近く前のケベックの文学状況を思い起こすよい機会になるかもしれないので、多少の解説を試みたい。

舞台はこの小説が出版された80年代当時のモンリオール。より正確には、サンドニ通り3670番地、サンルイ公園のすぐそばの安アパートの一室とその周辺である。話者の「おれ」は相棒ブーバとこの部屋をルームシェアしている。狭い部屋は「屏風」で仕切られ（ダニー・ラフェリエールの日本趣味の萌芽はすでにあった）、向こう側ではニグロの隠者ブーバが日が一日ソファベッドの上でジャズを聴きながらアルコールランプで沸かした上

海茶を啜り、コーランやフロイト全集に読みふけっている。そしてこちら側の「おれ」はいつか作家として華々しくデビューしたいという野望を抱きつつ、チェスター・ハイムズが所有していた（といわれる）タイプライター、レミントン 22 を前にして『すけこましニグロのパラダイス』の執筆に余念がない……。

夏のモンリオールの狭いアパートの室内はうだるような暑さである。2人の生活は質素そのもので、人から羨まれそうなものなど何一つないのだが、なぜかそこにはさまざまな白人女性たちが集まってくる。ミズ・リテラチュア、ミズ・シュイサイド、ミズ・ソフィスティケイティド・レディ、ミズ・パンク、ミズ・スノップ、ミズ・ミスティック……。なかでも中心的存在であるミズ・リテラチュアはモンリオールの英系名門大学であるマギル大の女子学生でフェミニスト文学クラブのメンバーだが、アパートを訪問するたびに食糧や花束を持参し、部屋を掃除したり食器を洗ってくれたりする。「おれ」はなぜ、白人女性がこれほどニグロに関心をもつのか、不思議でならない。

タイトルがいみじくも示しているように、この小説の中心的テーマは人種とセックスである。ポルノ小説まがいのページの隅々には、人間の赤裸々な「非言語コミュニケーション」で露わにされる白人対黒人、男性対女性（それにケベック的文脈も加えるなら英系対仏系）の力関係にたいする鋭い文明批評が見え隠れする。たとえば、「おれ」はミズ・リテラチュアと交わりながらこんなことを考えている。「西洋的価値観の階梯においては、白人の女は白人の男より下で、ニグロの男よりも上なのだ。彼女がニグロとでなければ本当の快楽を感じないのは、そこに理由がある。[...] 白人の女は白人の男を楽しませなくてはならない。そしてニグロの男は白人の女を楽しませなくてはならないのだ。セックスの偉大なる達人としてのニグロの神話はそこから来る（立花訳 p.57）」一方で、サー・ジョージ・ウィリアムズ大学のお嬢様であるミズ・ソフィスティケイティド・レディ（彼女はつねにカロリー計算表を持ち歩き、完璧な体型を保っている）がそのもったいぶった態度をかなぐり捨てて大胆なセックスを求めてくると、「おれは、女のアイデンティティを貫きたいと願う。人種論争を彼女の臍物奥深くまで突き進めたい。おまえはニグロなのか。おまえは白人女なのか（立花訳 p.98）」と言い、人種の階層秩序をセックスアピールの力で転倒させようと試みるのである。

この2人の他にも、さまざまな白人女たちが登場する。カウンセリングの

ためにブーバのところを定期的に訪れる自殺願望に取り憑かれたミズ・シュイサイド、同じくブーバのところを訪れるチベット帰りのミズ・ミスティック、固有名詞を連発して知的会話を繰り広げるミズ・スノップ、太陽の光を存分に浴び、白い歯と明るい微笑がかわいらしいミズ・カバーガール…。彼女たちに案内されて、話者は高級住宅街に住む英系家庭の生活ぶりを垣間見たり、客たちが黙々と馬肥やしを食べているベジタリアンレストランや、エキゾチックな植物がジャングルのように生い茂ったバー、セネガル出身のミュージシャンたちによるコンガドラムのエレクトロニックなリズムに乗せて白人たちが踊り狂うホールなどの「名所」に足を踏み入れることになる。

しかし、当然のことだが、一見自伝的と見えるこの一人称小説の中で、どこまでが現実の記述で、どこからが夢なのかはまったく判然としない。何しろダニー・ラフェリエール自身と限りなく重なり合う作家志望の話者が登場するとはいえ、彼が書き留めているのは「妄想」であることを自認しているだけでなく、彼はタイプライターの横でいつしか眠りこみ、夢の中の出来事を自動筆記していることもあるのだから。そもそも、彼を取り巻く大勢の女性にしてみても、その名づけられ方からして、作家自身が交際した（している）現実の女性というよりは、多分に戯画化された「典型」と見ることができよう。

たしかなことは、28の断章から成るこの「小説」は、60年代の「静かな革命」を経て多様化した価値観の中で、英系・仏系の別を問わず人々（とりわけスノップなインテリたち）が西欧＝キリスト教に代わる心の拠り所を求めて東洋趣味や未開なものを志向するようになった70年代から80年代の北米の一国際都市の風俗を、移民というよそ者の目で活写した貴重な資料になっているということである。

一見脈絡のない雑多なスケッチの寄せ集めと見えるところはダニー・ラフェリエールの後の作品群にも通ずる特徴で、ポストモダンの雰囲気や漂わせるのに功を奏している。しかし、その無秩序とも思える外観の背後には、チャーリー・パーカーやデューク・エリントン、ビリー・ホリデーやチャーリー・ミンガスなどのジャズが通奏低音のごとく鳴り響き、コーランの一節が絶妙なタイミングで挿入される。そして何よりも、この小説の主要テーマである白と黒のコントラストがさまざまな変奏とともに執拗に繰り返されるのである。そのコントラストは白人女と黒人男の性的関係に始まり、いつしかタイプライターが白い紙の上に黒いインクで打ち出す「妄想」へと姿を変え、

最後は、話者の『すけこましニグロのパラダイス』が完成して、売れ行き好調でミズ・ボンバルディエのインタビュー番組「白黒つけよう」に呼ばれるという夢で締めくくられる。しかも、『ニグロと疲れないでセックスする方法』の出版と同時にラフェリエールはほんとうに彼女のインタビューを受けることになり、「妄想」は「現実」と化するのだから面白い²。

トントン・マクートが暗躍するハイチでジャーナリストをしていたダニー・ラフェリエールが身の危険を感じてほとんど身一つでモンリオールに到着したのは1976年の夏、ちょうど町がオリンピックに湧いていた時期だった。その翌年にはケベック州をフランス語化するのに絶大な効力を発揮した言語法101号法（フランス語憲章）が制定されるのだから、身の安全と表現の自由を求めてケベック州を移住の地に選んだのはハイチ人として先見の明があったということになるだろう。それから10年後、80年代後半のケベック社会では多民族化が進展し、移民作家たちの活躍の場も急速に拡大して「移住（者）のエクリチュール *écriture migrante*」の流れが形成されていく。身寄りがなく、寝食にも事欠いた到着直後の様子は後年『穏やかな漂流の年代記』（1994年）で回想されることになるが、『ニグロと～』はそのような状況下で発表されたもので、ラフェリエールにとっては長い下積み生活を経てようやくとらえたチャンスだったのである。だから彼の野心は生半可ではない。話者が豪語する「おれはアメリカ³が欲しい。そこは一步も譲る気はない。[...] 全てが欲しい、善いものも悪いものも。捨てた方がいいものも、残しておいた方がよいものも、醜いものも、美しいものも。アメリカは一つの全体だからだ（立花訳 p.36）」という言葉は多分にラフェリエール自身の願望でもあったはずだ。

わずか数行から成る最終章のタイトルは、ボーヴォワールの有名な言葉をもじって「人はニグロに生まれるのではない。ニグロになるのだ」である。けだし、女もニグロも社会的につくり出された存在だということだろう。「ブルドッグのようにむっくりしたおれの小説。おれの唯一のチャンス」の鎖を解き放ち、「行け Va」と命じて終わる最終章からは、かつてペールラシェーズ墓地からパリの町を見下ろして「今度はおれとおまえの対決だ！」と叫んだ青年ラスティニャック⁴の気迫にも似たものが伝わってくる。

原書には80年代のケベック社会をあぶり出す多くの固有名詞がスノッブなまでに連ねられている。立花訳はそれらに有益な注をつけつつ、少なからずあったはずの苦勞を感じさせない流麗かつポップな文体で原文の雰囲気

伝えてくれている。プーバがときおり使う女っぽい言葉は当然のことながらフランス語の原文からは感じとれないが、男同士の会話が続く部分で発話者を特定しやすくするために訳者が工夫したものだと思われる点もつけ加えておきたい。

(おぐら かずこ 立教大学教授)

注

- 1 「おれ」の交際相手の多くは「ミズ Miz ~」（フェミニストたちの批判を浴びないように綴りが巧みにアレンジされている）と渾名され、アングロサクソン系である点も意味深長である。
- 2 Denise Bombardier によるインタビュー« Le fantasma selon Dany Laferrière »（ラジオ・カナダ、1985年11月8日）：http://archives.radio-canada.ca/arts_culture/litterature/clips/14084/。ただし、1979年に始まった« Noir sur blanc »という番組は1983年に終了している。
- 3 北米大陸全体を指す。Dany Laferrière, *J'écris comme je vis*, Boréal, 2010, p.187-189 他参照。
- 4 バルザック『ゴリオ爺さん』1835年。